

自然賛歌

雑草の詩

妹尾治人

雑草という名の草はない。

栽培されることのない地味な草を、総称して雑草という。雑草を人間にたとえると、自力で力強く生きるド根性の野人とでも云える。雑草は、人間の世話になることもなく、時には、人間に逆らって、田畑にまで侵入してくるので、どちらかと云えば嫌われ者にされる。生活力の強い雑草は、何処にでも生えていて、何時でも見ることが出来る。

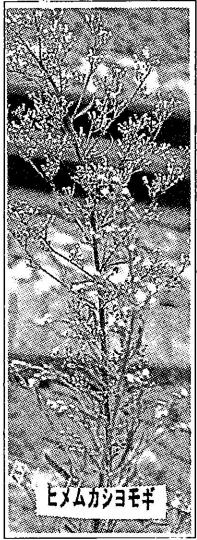
雑草の名を、図鑑で調べると、日本古来のものと、外来種のものがあるが、それらが入り乱れて生長しているのが雑草である。

国境を 知らぬ草の実 しばれ合い

井上信子作

という有名な句があるが、雑草には国境はなく、風に運ばれ、又、人に運ばれて、地球上何処へでも進出し、陣取り合戦のように繁殖していく。

外来種の中でも、一番ポピュラーなものはヒメムカシヨモギ(キク科)だと思ふ。この草は、明治年間に北アメリカから貨物船の積荷に紛れ込んで入ってきたので、御維新草・明治草、何処にでも生い茂るので鉄道草、ペンペン草・アレチノギク等々、沢山の別名が付けられている。



平成十三年八月十日に、廿日市大橋(全長八三五m)が開通した。

この大橋の取付地附近の雑草を観察してみる。この埋立地に一番先にヒメムカシヨモギが生えてきて、続いて、セイタカアワダチソウ・ヨモギ・アメリカセンダングサ・メドハギ・アカザ・エノコログサ・カルカヤ・ツキミソウ・クズ等々、日本種、外来種が入り乱れ、競ってやっけてきている。

更地に、どのようにして種が運ばれてくるのか分からないが、雑草の強さには、たゞたゞ驚くばかりである。

広島に、原子爆弾が投下され、放射線の影響で七十五年間くらいは、生き物は生育出来ないだろうと云われていた。ところがその焼け跡にヒメムカシヨモギが芽生えて来た。

草が育つということは、人間も住むことが出来るのだと、人は悟り、喜び、焼け跡に板切れを集めて仮設小屋を作り、再び人は生活を始めた。この草は、食料難の当時には食用にもされた。

したたかな生命力を持つヒメムカシヨモギは市民に生きる夢と希望を与えてくれた。

ところで、国土交通省の主催する外来種影響対策研究会で、在来種保護対策として、外来動植物の積極駆除の検討がなされていることが、昨年三月五日の中国新聞で報道された。それによると積極駆除の対象で動物では、ブラックバス・ブルーギル、植物では、ハリエンジュ・オオブタクサ・セイタカアワダチソウ・イチビ・マルバルコウソウ等が挙げられている。

ところが、在来の小魚を食い荒らす、ブラックバス・ブルーギルの駆除は、いざ知らず植物については、外来種と云えども空気浄化

に役立ち、昆虫や野鳥を育てる立役者となっている。

在来種保護対策としての外来種の駆除という大義名分であるが、約三十年前、時の東大総長(退官後であったか?) 茅誠治氏の「セイダカアワダチソウは今、完全駆除せねば、その繁殖力に在来種の植物の、その多くの絶滅が懸念される」と新聞紙上読書欄に投稿されて、当時、随分と世間を騒がせた。しかし先生が云われる程、セイダカアワダチソウの繁殖力に在来種が全部やられたであろうか。たしかに日本全国至るところにセイダカアワダチソウは、はびこっているが、適当なところで共生しているのが現状である。

人間の都合で生き物の生存を左右する対策をたてるのは、如何なものか。

生き物全体に及ぼす影響を、考慮し、よく検討して、外来動植物の功罪を十分調査の上対処してもらいたいものである。

雑草の 生きる力を 褒めてやる

(自然観察指導員)

廿日市大橋と雑草 (廿日市取付地附近)

